研究発表　分科会 5-2　身体と社会 10 月 15 日（日）15：40-16：20　第一校舎 121

「身体」が見る複相的な世界
―― メルロ＝ポンティの『眼と精神』が示す身体と自然

東京工芸大学　柿沼 美穂

メルロ＝ポンティは『眼と精神』の中で、自然が画家に「話しかけてくる」ことについて述べている。これはいわゆる純粋な知覚ではないが、一種の受動的総合の体験と考えられる。

一般に、受動的総合は、能動的総合によって加工される素材のようにとらえられているが、『眼と精神』における画家の受動的総合には、能動的総合に変化を与える可能性をもっている。

メルロ＝ポンティにおける視覚については数多くの議論がなされているが、その多くは前期の『知覚の現象学』を主とするものである。前期の視覚論はフッサールの影響が強く、山口一郎氏のように、受動的総合によって与えられる知覚や経験が、時間とともに、習慣または記憶となって蓄積されていくと捉えるものが多い（『メルロ＝ポンティ研究』第 20 巻、 2016 年刊）。習慣はいわゆる習慣的身体において、記憶はより能動的な現勢的身体の関与とともに形成される。そして、その身体を有する「私」が、周囲の世界の問題や危険が生じた場合に、それを克服する、あるいはそれから逃れるためには、より意識的な現勢的身体の関与が要請される。シュナイダーはその例と考えられる。彼は、運動や知覚の経験が習慣的身体に蓄積できるが、それを現勢的身体とその働きにうまく結びつけられない。実際、現勢的身体によって、自らの受動的総合を、整理、秩序づけ、抽象化できない場合には、その知覚や運動が限定的なものになるとメルロ＝ポンティは考えている。つまり、新たな運動や知覚を拓くには、意識的な知覚や運動を抽象化や構造化が必要と想定されているのである。

ところが、『眼と精神』においては、それまで素材のようなものに過ぎなかった受動的総合の知覚や経験が、能動的総合の仕組みやプロセスを変化させる可能性をもつものとして取り上げられている。自然が「話しかけてくる」現象のほか、『眼と精神』でメルロ＝ポンティが注目するのは、抽象的考察から具体へ向かう線的遠近法のようなトップダウン的なものではなく、具体的な一本の線や個別的な色から可能な限りのイメージ喚起力を引き出すようなボトムアップ的なものである。そして、メルロ＝ポンティの後期における知覚や運動について、ルノー・バルバラス氏のように、「肉」という観点から考察した論文はある（『現代思想』2008 年 12 月臨時増刊号）が、「受動的総合」的に思われる知覚や経験が、「能動的総合」的な、記憶や経験全体の構成に影響を与える可能性に注目した論文は発表者の知る限り存在しない。

『眼と精神』においてメルロ＝ポンティが考える受動的総合の新たな可能性は、画家の独自のスタイルの可能の制約に結び付くものでもある。彼は後期の思想において、より複相的な身体観・自然観への入り口にたどり着き、人間の個性や創造性との関連に関する議論の契機としたのではないかと考えられるのである。